宝生会　秋の別会能

十月二十五日（日）
午後十二時始

12:00

鶴亀

シテ　亀出雲路　啓
　　鶴水上　嘉亘
ワキ　高井　松男
ワキツレ　則久　英志
　〃　野口　琢弘
間　野村万之丞
後見　宝生　和英
　　中村孝太郎
　　小林　晋也
　　和久荘太郎
大鼓　佃　良勝
小鼓　観世新九郎
笛　一噌　庸二
太鼓　徳田　宗久
地謡　今井　泰行
　　田崎　隆三
　　小林与志郎
　　登坂　武雄
　　水上　優

曲入

所は中国、古代の皇帝がお出ましになり、新年の節会が行われます。正面に威風堂々と皇帝が着座すると、臣下が進み出で、毎年の嘉例のごとく鶴と亀を召し出し、舞を舞わせ、皇帝閣下には舞の後、月宮殿に渡られて舞楽を奏されることを言上し、鶴と亀が舞台に入って来て舞を舞います。鶴と亀が皇帝に向かって礼をすると、皇帝は左右の袖の露を取って宮から下り、荘重な舞を舞い、臣下を引き連れて長生殿へ還御して行きます。小品ながら嘉例めでたい曲。

「曲入」の小書がつくと、長い詞章（クリ・サシ・クセ）が挿入され、シテはクセで舞を舞います。

能「鶴亀」（つるかめ）

12:50

萩大名

野村　萬

仕舞　実盛　大坪喜美雄
　　六浦　田崎　隆三
　　玉葛　金森　秀祥

野村拳之介
野村万蔵

休憩

玄宗皇帝は最愛の楊貴妃を失い、悲嘆のあまりその魂魄のありかを訪ねて来るようにと、方士に命じます。あちらこちらを探した方士は遂に蓬莱宮に至り、ここでやっと楊貴妃に巡り会い、楊貴妃亡き後の帝の嘆きの深さを伝え、確かに楊貴妃に会った事を帝に奏上するため形見の物をと玉の冠を一度は受け取りますが、二人しか知らない契りの言葉を望みます。妃は七夕の夜に交わした言葉を教え、冠を着けると昔を懐かしんで舞を舞い、再び冠を賜った方士が帰って行く小書き「玉簾」は作り物の宮の三方に葛帯を簾のように下げ、「玉の簾をかかげつつ」と本文通りの風情を見せます。

山内　崇生
佐野　由於
今井　泰行
小倉　健太郎

能「楊貴妃」（ようきひ）

14:00

楊貴妃

シテ　藤井　雅之
ワキ　殿田　謙吉
大鼓　亀井　忠雄
小鼓　大倉源次郎
笛　藤田朝太郎

玉簾

仕舞　蝉丸　前田　尚廣
　　江口　武田　孝史
　　熊坂　金井　雄資

間　河野　佑紀
後見　亀井　保雄
　　小倉　敏克
　　小倉　健太郎
　　亀井雄二

休憩

琵琶の名手藤原師長は日本にはもう学ぶべき師がいないと思い唐に渡る為、須磨の浦に立ち寄ります。一夜を求めた老人夫婦の所望に任せて琵琶を弾きますが折からの村雨に途中で止めてしまいます。琵琶と雨の調子の違いを言い当てた翁に、師長が強いて琵琶を弾かせると見事に弾きこなし、我こそ名器「絃上」の主、村上天皇の霊であると言って消え失せます。夜半生前の姿で現れた天皇は舞を舞い、竜神に「獅子丸」を持参させ師長に弾かせます。

「クツロギ」という小書では、後シテの舞う「早舞」の途中にシテが橋掛りへ行く型を見せます。

小倉　伸二郎
三川　淳雄
高橋　章夫
東川　光夫
東川　尚史

地謡　渡邊　茂人
　　宝生　和英
　　東川　光夫
　　和久荘太郎

能「絃上」（げんじょう）

16:00

絃上

竜神　高橋　憲正
姥　佐野　登
師長　朝倉　俊樹
シテ　辰巳満次郎
ワキ　工藤　和哉
ワキツレ　大日方　寛
　〃　野口　能弘
間　能村　晶人
後見　當山　孝道
　　澤田　宏司
大鼓　柿原　弘和
小鼓　曽和　正博
笛　槻宅　聡
太鼓　金春惣右衛門
地謡　大友　順
　　佐野　由於
　　大坪喜美雄
　　野月　聡
　　渡邊　茂人

クツロギ舞返

終演予定　十七時四十分頃

チケット料金

S席	13000円
A席	12000円
B席	11000円
C席	9000円
D自由席	5000円